



学	<p>主査：看護学分野教授 安保寛明 副査：作業療法学分野教授 藤井浩美、副査：作業療法学分野教授 佐藤寿晃</p>
位 論	<p>新規性・有効性</p> <p>当該分野において、読み書き障害をもたらす認知障害構造とその測定方法はゴールドスタンダードが確立していない。本研究では、書き写し課題における見本への参照時間と参照回数に注目する過程で、書き写す見本の文字（本研究のターゲット）に注目する時間が長いことを意味する過長時間という指標を考案してターゲット探索の困難さを記述した。このことで、読字障害を有する子どもの書き写し課題において見失ったターゲットを探索する際に時間を要していることが観察・記述できるようになり、読字障害を有する子どもに生じている困難を具体的に記述することができた。読字障害を有する子どもの経験を理解する上で重要な知見であり、臨床上の応用が可能な点で有効性が高い。</p>
文 審 査	<p>信頼性</p> <p>この研究では、書字の困難さがある子どもとそうでない子ども各3名を対象に、視機能や視知覚、音韻認識などの機能に信頼性の高い測定法や指標を用いて書字困難に関係する機能を多面的に分析して障害構造の分析を精緻に行っている。また、書き写し課題の遂行度の評価には先行研究において実績のある指標を採用するとともに、眼球運動を赤外線により取得して課題遂行中の参照時間の測定を精緻におこなうことでデータの信頼性を高めた。</p> <p>これらの信頼性の高い測定手法や解析方法を用いたことで、書字困難のある子どもの書き写し課題においてターゲット探索に困難が示されること、ターゲット探索時間の延長が書き写しに時間を要する要因であること、ターゲット探索の負担軽減と書き写しの総所要時間短縮にはタイポスコープの使用が有効であることが明らかになった。</p>
結 果 要 旨	<p>総評</p> <p>この研究では、障害部位や構造が明らかになっていない書字困難を有する子どもに対して、視機能などの測定を行って機能面の査定を十分におこなった上で書き写し課題をおこない、読字障害を有する子どもが参照すべき標的（本研究の場合は書き写すべき文字）を一度見失った際の再探索に時間を要することが多いこと、注目する対象を絞りやすくするタイポスコープの使用によってその困難が軽減することが明らかになった。読字障害の背景にある障害構造の理解にも有効な知見であり、当該分野の発展に大きく貢献する研究である。</p> <p>審査委員は、論文構成、背景の整理と問題設定、結果および考察、引用文献の適切性について慎重に検証し、博士論文として適切な水準に至っていることを確認した。また、口頭試問の際にも研究者自身が未知と既知を整理して論述した。本論文は博士論文に値する内容であると評価し、一致して学位論文審査及び最終試験に合格と判断した。</p>